

提出日：令和 3 年 2 月 26 日

所 属： 獣医 学部 獣医 学科

氏 名： 小澤 秋沙 職位： 助教

## I ティーチング・ポートフォリオ

### 1. 教育の責任（教育活動の範囲）

科目名	学科・専攻	必, 選, 自	配当年次	受講者数
獣医組織学実習	獣医学科	必修	3年	150
動物解剖・生理学実習	動物応用科学科	必修	2年	140
特別ゼミ	動物応用科学科	必修	3年	1

獣医組織学実習：各器官、組織における細胞の形態的特徴及び組織化学的特徴を理解することを目的とする。

動物解剖・生理学実習：比較解剖を通して動物毎の解剖学的特徴を理解する。また各器官、組織を構成する細胞の形態学的特徴を理解することを目的とする。

特別ゼミ：卒業研究を通して、考える力を培うことを目的とする。

### 2. 教育の理念（育てたい学生像, あり方, 信念）

解剖学分野の教育を通して身体の部位、構造などを表す名称を学ぶことで動物の専門科目における共通言語として習得することが第一目的である。しかし、解剖用語をただ単に暗記することが目的ではなく、各名称に含まれる意味を理解しながら、解剖分野のあとに学ぶ専門科目への意識付けをできるように心がける。

ただ知識として暗記するだけでなく、体の仕組みを詳細に理解するための基礎として理解させる。知識だけを詰め込んだ獣医師や社会人にならないように、持っている知識の応用を意識させ、自ら考え行動できる人物を育成する。

考える切掛けを与えるために、最初からすべての知識や答えを伝えることはせず、なぜこうなっているのかを問いかけながら、徐々にヒントを出しつつ学生自らが答えに行きつけるように誘導するよう心がけている。

### 3. 教育の方法（理念を実現するための考え方, 方法）

実習でのスケッチの確認：これまでは質問する学生には双方向の対応が可能であるが、質問をしない学生の理解度を図り、もれなくすべての学生と双方向の実習にするために、個々の学生のスケッチ確認を対面で行っていたが、今年度は限られた時間内になるべくこれまでと同程度の実習内を行ったため、各単元における対面実習時間を短縮し、例年通りのスケッチの確認はできなかった。そのため、オンラインで提出されたスケッチを確認し、各組織間で共通する

注意すべき点などのフィードバックを行い、次のスケッチをする際の参考となるようにした。実習中の進行具合の把握及び助言：対面で実習が行えた場合は実習中の進行具合を確認し、必要がある場合は教員から学生に声をかけ、理解を促す。自ら質問を積極的に行わない学生に対しても気づきを与えられるようにしている。

#### アクティブラーニングについての取組

実習自体がアクティブラーニングの一つだと考える。獣医組織学実習では学生からの質問への対応は答えを学生自身が導くようにしている。

#### ICTの教育への活用

獣医組織学実習では4年前から実習中に教員及びTAがiPadを携帯し、学生からの質問に対して、模範となる組織像を示しながら対応している。プロジェクターでの組織像よりも鮮明な写真を使用して、1対1の対話形式で対応することが可能であるため、学生からも好評である。

#### 4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

①教育（授業、実習）の創意工夫（A）

②学生の理解度の把握（A）

③学生の自学自習を促すための工夫（B）

④学生とのコミュニケーション(質問への対応等)（A）

⑤双方向授業への工夫（B）

※A（十分実施している） B（実施しているが十分でない） C（うまく取り組めていない）

⑥国家試験対策としてどのような取組をしましたか。

総合獣医学を担当していないため特になし

#### 5. 学生授業評価

① 授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

予習復習の項目が低い結果であり、さらに今年度は対面実習の機会及び1回の実習時間が例年よりも限られていたため、予習の重要性を実習前にアナウンスした。

② ①の結果はどうでしたか。

予習の有無は学生間で差が感じられた。具体的には前週に伝えた予習ポイントをしっかりと聞き対応している学生は理解度を深めていたが、予習等に対応していない学生は実習内での講義内容の理解が不足しているように感じられた。

③ ②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。

予習、復習については教員から課題を与えるや小テストを実施することで改善が見られるという助言を頂いたので、課題及び小テストの導入を検討したい。

#### 6. 学生の学修成果

① 学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

学生の習熟度を上げるためには毎年学生が苦戦している部分については強調して説明し、重要な点についての意識付けを心がけ、質問に対する対応ではただ答えるだけでなく段階を踏んだ誘導を行い学生の理解を深めるようにしている。また、追試対象者については随時質問を受けつけ、特に学習意欲がある学生に対しては1時間以上の対面で質問への対応を連日行った。動物応用化学科の学生に対しては追再試験対象者のために復習講義を行った。この復習講義は教員が学生に質問し、学生からの答えに教員は内容を追加するというようにアクティブラーニング形式で行った。これらのことを実施するために、コミュニケーションに重点を置き、学生が組織学に興味を持てるように取り組んでいる。

②教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

7. 指導力向上のための取組 (FD 研究会参加状況)

8. 今後の目標 (理念の実現に向かう今後のマイルストーン)

学習意欲の高い学生のさらなる成長を促すため、講義、実習においても受け身ではなく「考えること」が身に付けられるような双方向の教育を目指したい。

9. 添付資料 (根拠資料) (※) 資料名のみ

講義プリント